

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 10-021216

(43)Date of publication of application : 23.01.1998

(51)Int.Cl.

G06F 17/00

G06F 17/60

(21)Application number : 08-171967

(71)Applicant : MATSUSHITA ELECTRIC WORKS LTD

(22)Date of filing : 02.07.1996

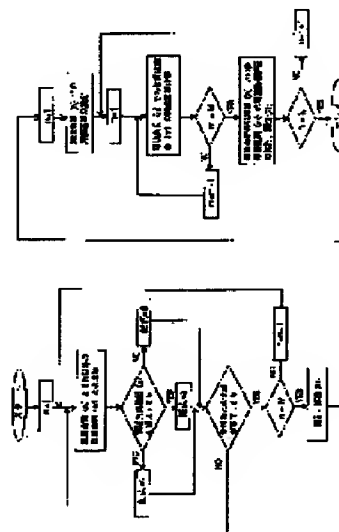
(72)Inventor : SHIBATA TOMOTAKA

(54) ENVIRONMENTAL INFLUENCE EVALUATING METHOD

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain a convenient and reliable evaluation method by combining an environmental load importance evaluating table quantitatively ordering the necessity of control between environmental loads and an environmental aspect evaluating table quantitatively evaluating the necessity of the control of an environmental aspect for each environmental load.

SOLUTION: In the processing of quantitatively ordering the necessity of the control of the environmental loads, 'n' is set and the environmental load 'n' setting (n) as an argument is made a comparing subject to successively compare the importance of control in pairs with the respective environmental loads (n') excepting for it. Comparing evaluation is repeated until the comparing evaluation of all the pairs are completed by $n=N$. The result of comparing evaluation is tabulated and point-allotted by the environmental load importance evaluating table. Next, 'n' being the argument of the environmental load is set to set the kind of the environmental load to set an evaluating reference for evaluating the environmental aspect concerning the environmental load (n). Next, the argument 'm' of the kind of the environmental aspect is set to point-allot evaluation items to an environmental aspects (m) according to the evaluating reference.



LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2000 Japanese Patent Office

(11)特許出願公開番号

特開平10-21216

(43)公開日 平成10年(1998)1月23日

技術表示箇所

D

Z

審査請求 未請求 請求項の数5 O.L (全 8 頁)

(71)出願人 000005832

大阪府門真市大字門真1048番地

大阪府門真市大字門真1048番地松下電工株式会社内

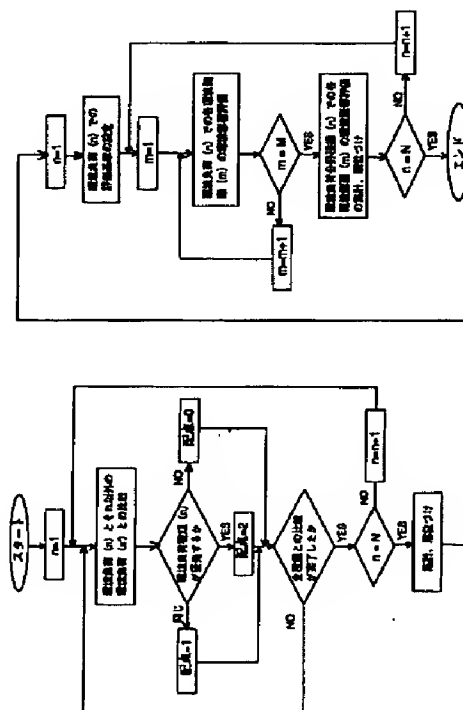
(74)代理人 弁理士 佐藤 成示 (外1名)

(54) 【発明の名称】 環境影響評価方法

(57) 【要約】

【課題】 本発明の目的は、環境負荷分野間の管理の優先順位付けという大局的な評価を行うと共に、各環境負荷分野毎に組織体の環境側面の管理の優先順位付けを効率的に行う環境影響評価方法の提供。

【解決手段】 大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音・振動、資源の枯渇及び産業廃棄物汚染などに代表される環境負荷について、環境負荷間における管理の必要性の定量的順位付けを行う環境負荷重要度評価テーブルと、該環境負荷毎に、薬品貯蔵設備、生産設備、原材料、燃料、エネルギー、産業廃棄物等の環境管理要素に代表される環境側面の管理の必要性の定量的順位付けを行う環境側面評価テーブルとを組合せて評価する。



【特許請求の範囲】

【請求項 1】大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音・振動、資源の枯渇及び産業廃棄物汚染などに代表される環境負荷について、環境負荷間における管理の必要性の定量的順位付けを行う環境負荷重要度評価テーブルと、該環境負荷毎に、薬品貯蔵設備、生産設備、原材料、燃料、エネルギー、産業廃棄物等の環境管理要素に代表される環境側面の管理の必要性の定量的順位付けを行う環境側面評価テーブルとを組合せてなることを特徴とする環境影響評価方法。

【請求項 2】環境負荷間における管理の必要性の比較定量的順位付けを、比較主体の環境負荷とそれ以外の環境負荷とを一对比較する環境負荷重要度評価テーブルを用いて行うことを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法。

【請求項 3】環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルには、各環境側面にて保有し、使用し、加工又は処理する原材料、燃料などの使用材の種類毎の使用量と該使用材の環境関連法規制の基準値や業界取り決め値などに基づく有害性評価換算値と、環境負荷の発生確率の評価換算値とを用いることを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法。

【請求項 4】環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルには、廃棄物の種類毎の発生量と該廃棄物の処理単価とを用いることを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法。

【請求項 5】環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルには、資源枯渇に関し、使用材の購入量と単価とを用いることを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法。

【発明の詳細な説明】**【0001】**

【発明の属する技術分野】本発明は、国際規格 ISO 14001 に準拠し、企業、病院、学校などに代表される組織体が構築する環境管理システムにあって、該組織体が有する環境負荷及び環境側面の管理の必要性の定量的順位付けを行う環境影響評価方法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】従来より、環境影響評価方法として、簡易マトリクス法が広く用いられてきている。

【0003】このものは、環境側面と環境負荷分野とを基軸とするマトリクス表を評価シートとして使用するもので、所定の評価配点基準により、各環境側面の持つ各種の環境負荷を採点集計して管理の有意性を比較評価するものである。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、上記従来技術においては、各環境側面に対し、各環境側面が持つ多面的な環境負荷を総合的に評価するものである点に

問題がある。総合的加算方式においては、特定の環境負荷分野で重要な環境影響を及ぼすものがあっても、その他の環境負荷分野での影響が少ない場合、総得点が低くなり、結果としてその環境側面が埋没する危険性がある。

【0005】すなわち総合的加算方式においては、いわゆるどんぶり勘定にて、リービッチの最小法則にいうところの必須要因の抽出ができない危険性がある。

【0006】本発明の目的は、環境負荷分野間の管理の優先順位付けという大局的な評価を行うと共に、各環境負荷分野毎に組織体の環境側面の管理の優先順位付けを行う環境影響評価方法を提供するものである。

【0007】

【課題を解決するための手段】上記のような目的を達成するために、請求項 1 に記載の発明は、環境負荷間における管理の必要性の定量的順位付けを行う環境負荷重要度評価テーブルと、該環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の定量的評価を行う環境側面評価テーブルとを組合せてなることを特徴とする環境影響評価方法である。

【0008】請求項 2 に記載の発明は、環境負荷間における管理の必要性の定量的順位付けに比較主体の環境負荷とそれ以外の環境負荷とを一对比較する環境負荷重要度評価テーブルを用いることを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法である。

【0009】請求項 3 に記載の発明は、環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルに、各環境側面で保有し、使用し、加工又は処理する使用材の使用量と該使用材の環境関連法規制の基準値や業界取り決め値などに基づく有害性評価換算値と、発生確率の評価換算値とを用いることを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法である。

【0010】請求項 4 に記載の発明は、環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルに、産業廃棄物の種類毎の発生量と該廃棄物の処理単価とを用いることを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法である。

【0011】請求項 5 に記載の発明は、環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルに、資源枯渇に関し、使用材の購入量と単価とを用いることを特徴とする請求項 1 記載の環境影響評価方法である。

【0012】

【発明の実施の形態】本発明の一実施形態を図 1 ～ 図 3 で説明する。

【0013】

【実施例】図 1 に本発明の環境影響評価方法の実施フローチャートを示す。

【0014】図 2 に本発明の環境影響評価方法の環境負荷重要度評価テーブルを示す。図 3 に本発明の環境影響評価方法の環境側面評価テーブルを示す。

【0015】本発明の環境影響評価方法は、図1の前半に示される環境負荷の管理の重要性の定量的順位付けと、後半に示される各環境負荷別に行う環境側面の管理の必要性の比較定量的順位付けの2段階にて行う。

【0016】環境負荷間における管理の必要性の定量的順位付けは図2に示す環境負荷重要度評価テーブルを用い、各環境負荷別に行う環境側面の管理の必要性の定量的順位付けは図3に示す環境側面評価テーブルを用いる。

【0017】図1において、Nは環境負荷の種類数を示し、 n, n' はいずれも環境負荷に予め付与される1から始まりNまでの追番の引数を示す。Mは各環境負荷における環境側面の種類数を示す。Mは環境負荷の種類により異なる。 m は環境側面に予め付与される1から始まりMまでの追番の引数を示す。

【0018】環境負荷の管理の重要性の定量的順位付けの処理において n を設定し、 n を引数とする環境負荷(n)を比較主体とし、該比較主体とそれ以外の環境負荷(n')のそれぞれと一対にて管理の重要性を順次比較する。

【0019】比較結果は後述する配点法にて配点する。比較主体の環境負荷(n)とそれ以外の環境負荷(n')との比較が完了すると、 n を $n+1$ に置き換え、その時点での n の番号の環境負荷を比較主体として比較評価を反復する。

【0020】この比較評価の反復は図1に示すように $n=N$ にて全組合せの比較評価が完了するまで行う。

【0021】比較評価結果は図2に示す環境負荷重要度評価テーブルにて集計される。各一対比較の結果の配点

(n, n')は、比較主体の環境負荷(n)を基軸として比較し、比較主体の方が管理の重要性において優先すると判断される場合に2点を、同等と判断される場合は1点を、それ以外は0点を配し、それらを集計し、評価点とする。

【0022】次に、環境影響評価の第2段階目の各環境負荷毎に、該環境負荷に係わる環境側面の評価の方法について図1の後半に示すフローおよび第3図に示す環境側面評価テーブルにて説明する。

【0023】環境負荷の引数である n を設定することにより、環境負荷の種類を設定し、該環境負荷(n)に係わる環境側面を評価するための評価基準を設定する。

【0024】次いで環境側面の種類の引数の m を設定し、該環境側面(m)について、評価基準に定めた評価項目について評価基準に従い配点する。

【0025】第3図に示すように所定の環境負荷(n)において環境側面(m)における評価項目(f)を評価基準に従って評価し、配点する。

【0026】配点(m, f)は環境側面間の管理の必要性の定量的順位付けの評価点として集計される。

【0027】尚、説明を容易にするために評価点の集計の方法として図3においては加算方式のみを提示しているが、これに限らず加減乗除の組合せもあり得る。

【0028】以下、具体的実施例にて詳述する。表1は環境負荷間の管理の必要性の定量的順位付けを行った環境負荷重要度評価結果である。

【0029】

【表1】

表1 環境負荷重要度評価結果

n	環境負荷(n)	環境負荷(n') および 配点(n,n')						評価点 $\Sigma(n,n')$	順位
		資源の枯渇	水質汚濁	土壌汚染	産業廃棄物	騒音振動	大気汚染		
1	資源の枯渇	・	0	2	1	2	2	7	2
2	水質汚濁	2	・	2	2	2	2	10	1
3	土壌汚染	0	0	・	0	2	1	3	
4	産業廃棄物	1	0	2	・	2	2	7	2
5	騒音振動	0	0	0	0	・	0	0	
6	大気汚染	0	0	1	0	2	・	3	

【0030】表1に示すように環境負荷重要度評価テーブルとして一対比較法を用い、環境負荷の種類として資源の枯渇($n=1$)、水質汚濁($n=2$)、土壌汚染($n=3$)、産業廃棄物($n=4$)、騒音・振動($n=5$)及び大気汚染($n=6$)の6種類を取り上げ評価を行った事例である。

【0031】比較評価において、資源の枯渇($n=1$)を比較主体とし、水質汚濁($n'=2$)との管理の重要性比較において、比較主体に比べ水質汚濁の方が優先さ

れると判断され、配点($n=1, n'=2$)には0が配されている。

【0032】次いで土壌汚染($n'=3$)との比較において、配点($n=1, n'=3$)には2点が配され、以降同様に比較を行ない、結果として資源の枯渇(n)の評価点は7点となっている。

【0033】比較主体を $n=2$ から $n=6$ まで順次同様に比較を行ない、結果として、表1に示すように本実施例においては、環境負荷別の評価は、水質汚濁が最も優

先して管理すべき環境負荷と評価され、次いで産業廃棄物及び資源の枯渇の順となっている。

【0034】表2は資源の枯渇に係わる環境側面について、各種環境側面間の管理の必要性の比較定量的評価を

表2 資源の枯渇における環境側面評価結果

n=1 環境負荷（資源の枯渇）						
m	環境側面 物質名	l=1 数量	f=2 単価	l=3 評価係数	評価値	順位
1	エポキシ樹脂	90	30	1	2700	2
2	MEK	10	10	1	100	
3	フェノールモノマー	10	10	1	100	
4	ホルマリン	10	3	1	30	
5	銅	40	100	1.5	6000	1
6	ガラス繊維	60	20	1	1200	3
7	無機酸	10	2	1	20	
8	アルカリ	17	7	1	119	
9	機械油	0.2	5	1	1	

【0036】表2に示すように環境側面の種類として、エポキシ樹脂（m=1）、MEK（メチルエチルケトン）（m=2）、フェノールモノマー（m=3）、ホルマリン（m=4）、銅（m=5）、ガラス繊維（m=6）、無機酸（m=7）、アルカリ（m=8）、機械油（m=9）の9種類を評価している。

【0037】表2に示すように評価項目として数量と単価を取り上げている。評価項目としての数量の評価基準は、月間の使用量でトン単位の数値を配点している。即ち消費量の多い環境側面ほど管理の必要性が高くなるように配点される。

【0038】評価項目としての単価の評価基準は、各環境側面の単位重量当りの価格で、ここではトン当たりの万円単位の数値を評価基準として配点している。一般に稀少なものほど高価であり、又、人手がかかりエネルギーを多消費するものほど高価であると仮定している。即ち、単価の高いものほど環境負荷が大きいと仮定し、管理の必要性が高くなるように配点している。

【0039】本実施例では更に表2に示すように、評価項目として評価係数を取り上げている。これは資源の枯渇に関し、埋蔵利用年数を配慮したものである。

【0040】表3に評価係数換算表を示す。埋蔵利用年数が判明しているものについて、短いものほど管理の必

行った評価結果である。

【0035】

【表2】

要性が高くなるように配点している。

【0041】

【表3】

表3 評価係数配点表

項目	内容	配点
評価係数 (埋蔵利用年数)	10年未満	3
	10～20年未満	2
	20～50年未満	1.5
	50年以上又はデータなし	1

【0042】銅の埋蔵利用年数は西山孝著「資源経済額のすすめ」によれば39年とあり、評価係数としての配点は1.5が配される。

【0043】資源の枯渇に関し各環境側面（m）の管理の必要性の評価結果を示す評価点は、評価項目（f）である数量、単位、評価係数に配された各配点（m, f）を掛け合わせたものである。値が大きいものほど管理の必要性が高いことを示す。

【0044】結果として銅、エポキシ樹脂、ガラス繊維などが高い順位となっている。表4は水質汚濁に係わる各種環境側面の評価結果である。

【0045】

【表4】

表4 水質汚濁における環境側面評価結果

n=2 環境負荷（水質汚濁）																	
m	環境側面 設備名	物質名	t=1 数量	有害性					発生確率					t=3 小計	t=5 確保	安全性 評価値	順位
				PH	BOD COD	SS	NTN ヘキソ	銅	小計	苦・指	定常	非定常	緊急				
1	貯蔵タンク1	重油	2			0.4	4		4.4	1	1	1	1	4	0.5	17.6	1
2	。 2	重油	1.5			0.4	4		4.4	1	1	1	1	4	0.5	13.2	2
3	危険物タンク1	無機酸	2	1					1	1	1	1	1	4	1	8.0	
4	。 2	アルカリ	3	1					1	1	1	1	1	4	1	12.0	3
5	有害物タンク	MEK	1		1				1	1	1	1	1	4	0.6	3.2	
6	反応釜	フェノール樹脂	0.5		1				1	1	1	1	1	4	0.8	1.8	
7	エッチング工程	銅	0.04	1	1			10	12	1	1	1	1	4	0.5	1.0	
8	食堂	生活排水	3		1				1	1	1	1	1	4	0.5	6.0	

【0046】表4に示すように環境側面の種類として、貯蔵タンク1（ $m=1$ ）、貯蔵タンク2（ $m=2$ ）、危険物タンク1（ $m=3$ ）、危険物タンク2（ $m=4$ ）、有害物タンク（ $m=5$ ）、反応釜（ $m=6$ ）、エッチング工程（ $m=7$ ）、食堂（ $m=8$ ）の8種類を評価している。

【0047】評価項目として、数量、有害性、発生確率を取り上げ評価を行っている。評価項目としての数量は各環境側面にて加工又は処理する原材料や燃料などの使用材の種類毎の1日当りの使用量または最大貯蔵量で、トンまたはk1単位の数値を評価基準として配点している。

【0048】評価項目としての有害性は水質汚濁防止に
関し、各環境側面で使用する物質の有害性を評価するも
ので、評価配点項目としてPH、BOD、COD、S
S、ノルマルヘキサン、銅を取り上げている。

【0049】表5に有害性の評価基準である配点表を示す。配点の基準は、環境関連法規制の基準値を活用し、ここでは最も排出基準の厳しい銅の排出基準を基にその逆数換算値を配点基準としている。即ち環境関連法規制の排出基準が厳しいものほど管理の必要性が高くなるよう配点される。

表6 発生確率評価配点表

項目	内 容		配点
発生確率	苦情・指導	過去1年で住民からの苦情、行政指導を受けたことがある	3
	緊急時	緊急事態の発生の可能性が大	2
	非定常時	非定常時（始動・停止時）に環境影響発生の可能性大	1.5
	定常時	定常時に環境影響発生の可能性大	3
		その他	1

【0055】表6に示すように苦情・指導は過去1年以内で住民からの苦情や行政指導の有無により評価を行う。緊急時は地震や火災時など緊急事態が発生した時に重大な環境影響の発生する可能性の有無により評価を行う。非定常時は装置の始動時や停止時における重大な環境影響の発生の可能性の有無により評価を行う。定常時は通常運転や取扱い時での環境影響の発生の可能性の有

【0050】

【表 5】

表5 有害性評價配點表

項目	内容	配点
有害性	PH	1
	COD,BOD	1
	SS	0.4
	ノズルキーン	4
	銅	10

【0051】有害性の評価においては、各環境側面で使用
する物質が評価配点項目に影響を及ぼし得ると考えら
れる場合に表5の該当する配点を配する。有害性はそれ
らを合算した小計にて評価される。

【0052】評価項目としての発生確率は水質汚濁の起こりうる可能性からの評価であり、評価配点項目として、苦情・指導、緊急時、非定常時、定常時の4項目を取り上げている。

【0053】表6に発生確率の評価基準である配点表を示す。

【0054】

【表 6】

無により評価を行う。それぞれ可能性が大と判断される場合に各評価指数が配点される。

【0056】本実施例では、更に表4に示すように評価項目として安全確保を取り上げている。これは環境側面の設備、工程における事故発生に対する予防への取り組み状況を評価するものである。

【0057】表7に安全確保の評価基準である配点表を

示す。評価基準は防油堤が2重安全となっていたり、センサー監視や配管が架空配管であり且つジョイント部がフレキシブルジョイントを使用しているなど2重安全となっている場合や更にそれらに加えて予備タンクが設置されているとか、中和剤や吸着材を整備して3重安全以上となっているかにより各評価指数が配点される。

【0058】

【表7】

表7 安全確保評価配点表

項目	内容	配点
安全確保	2重安全あり	0.8
	3重安全以上	0.5
	その他	1

表8 廃棄物における環境側面評価結果

n=4 環境負荷（廃棄物）								
m	環境側面 廃棄物	関連法規制対象	t=1 発生量	t=2 処理単価	t=3 有害性	t=4 増減	評価値	順位
1	揮発油	特別管理産業廃棄物	1	1	10	1	10	3
2	廃プラスチック	産業廃棄物	8.3	2	1	1.5	24.9	2
3	廃油	・	3.6	10	1	1	36	1
4	酸・アルカリ	・	1.3	5	1	1	6.5	4
5	汚泥	・	0.4	1	1	0.8	0.32	5

【0062】表8に示すように環境側面の種類として、揮発油（m=1）、廃プラスチック（m=2）、廃油（m=3）、酸・アルカリ（m=4）、汚泥（m=5）の5種類を評価している。

【0063】評価項目として、廃棄物の種類毎の発生量と該廃棄物の処理単価を取り上げている。

【0064】評価項目としての発生量は月間に発生し処理する量で単位はトン又はk1単位の数値を評価基準として配点している。即ち発生量の多いものほど管理の必要性が高くなるように配点される。

【0065】処理単価は廃棄物のトン当りの業者の引き取り価格のことでここでは万円単位の数値を評価基準として配点している。一般に処理単価の高いものほど、処理工数が掛かったり、エネルギーを多消費するなど、環境負荷が大きいと仮定し、処理単価の大きいものほど管理の必要性が高くなるように配点される。

【0066】本実施例では更に表8に示すように評価項目として有害性と増減を取り上げている。

【0067】表9に有害性の評価基準としての配点表を示す。廃棄物の種類が特別管理産業廃棄物の場合より管理の必要性が高くなるように配点される。

【0068】

【表9】

【0059】水質汚濁に関し各環境側面の管理の必要性の評価結果を示す評価点は、評価項目である有害性での配点小計、発生確率での配点小計及び安全性確保に配された各配点を掛け合わせたものである。値が大きいものほど管理の必要性が高いことを示す。本実施例において、表4に示すように貯蔵タンク1、貯蔵タンク2及び危険物タンクが高い順位となっている。

【0060】表8は産業廃棄物に係わる各種環境側面の評価に用いた環境側面評価テーブルとその評価結果である。

【0061】

【表8】

表9 廃棄物有害性評価配点基準

項目	内容	評価指数
有害性	特別管理産業廃棄物	10
	その他	1

【0069】表10に増減の評価基準としての配点表を示す。発生量の前年からの増減により管理の必要性が評価され配点される。

【0070】

【表10】

表10 廃棄物増減評価配点基準

項目	内容	評価指数
増 減	発生量が前年より増加	1.5
	・ 前年と同じ	1
	・ 前年より減少	0.8

【0071】表8において廃棄物に関し各環境側面の管理の必要性の評価結果を示す評価値は、評価項目である発生量、処理単価、有害性、増減に配された各配点を掛け合わせたものである。値が大きいものほど管理の必要性が高いことを示す。

【0072】本実施例において表8に示すように廃油、廃プラスチック、揮発油が高い順位になっている。

【0073】

【発明の効果】以上述べたように本発明は、請求項1に係る本発明の環境影響評価方法によれば、環境負荷間に

おける管理の必要性の定量的順位付けを行う環境負荷重要度評価テーブルと、該環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の定量的順位付けを行う環境側面評価テーブルとを組合せてなることを特徴とする環境影響評価方法であるので、組織体の持つ環境負荷に対し、大局的な評価を行ない、次いで、前段階で明らかになった重要度に応じて詳細な環境側面の評価を行うので効率的に行うことができる。

【0074】請求項2に係る本発明の環境影響評価方法によれば、環境負荷間における管理の必要性の比較定量的順位付を、比較主体の環境負荷とそれ以外の環境負荷とを一対比較する環境負荷重要度評価テーブルを用いて行うことを特徴とする請求項1記載の環境影響評価方法であるので、組織体の持つ環境負荷に対し、大局的な評価を簡便にして定量的に行うことができる。

【0075】請求項3に係る本発明の環境影響評価方法によれば、記載の発明は、環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルには、各環境側面にて保有し、使用し、加工又は処理する使用材の使用量と該使用材の環境関連法規制の基準値や業界取り決め値などに基づく有害性評価換算値と、発生確率の評価換算値とを用いることを特徴とする請求項1記載の環境影響評価方法であるので、環境管理要素

の環境影響の評価方法として、簡便にして、信頼性の高い評価方法を提供する効果を奏する。

【0076】請求項4に係る本発明の環境影響評価方法によれば、発明は、環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルには、廃棄物の種類毎の発生量と該廃棄物の処理単価とを用いることを特徴とする請求項1記載の環境影響評価方法であるので、環境管理要素の環境影響の評価方法として、簡便にして、信頼性の高い評価方法を提供する効果を奏する。

【0077】請求項5に係る本発明の環境影響評価方法によれば、環境負荷毎に、環境側面の管理の必要性の比較定量的評価を行う環境側面評価テーブルには、資源枯渇に関し、使用材の購入量と単価とを用いることを特徴とする請求項1記載の環境影響評価方法であるので、環境管理要素の環境影響の評価方法として、簡便にして、信頼性の高い評価方法を提供する効果を奏する。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一実施の形態のフローチャートである。

【図2】同上の環境負荷重要度評価テーブルである。

【図3】同上の環境側面評価テーブルである。

【図2】

n	環境負荷(n)	環境負荷(m) および 配点(m,n) m=1~N				評価点	順位
		A	B	C	D	X	
1	A	・	(1,2)	(1,3)	(1,4)	(1,N)	I(1,n)
2	B	(2,1)	・	(2,3)	(2,4)	(2,N)	I(2,n)
3	C	(3,1)	(3,2)	・	(3,4)	(3,N)	I(3,n)
4	D	(4,1)	(4,2)	(4,3)	・	(4,N)	I(4,n)
N	X	(N,1)	(N,2)	(N,3)	(N,4)	・	I(N,n)

【図3】

n=N 環境側面名 (X)							
n=3 環境側面名 (C)							
n=2 環境側面名 (B)							
n=1 環境側面名 (A)							
m	環境側面名	評価項目(m) および 配点(m,l) l=1~F				評価値	順位
1	a	(1,1)	(1,2)	(1,3)	(1,4)	(1,F)	I(1,l)
2	b	(2,1)	(2,2)	(2,3)	(2,4)	(2,F)	I(2,l)
3	c	(3,1)	(3,2)	(3,3)	(3,4)	(3,F)	I(3,l)
4	d	(4,1)	(4,2)	(4,3)	(4,4)	(4,F)	I(4,l)
5	e	(5,1)	(5,2)	(5,3)	(5,4)	(5,F)	I(5,l)
6	f	(6,1)	(6,2)	(6,3)	(6,4)	(6,F)	I(6,l)
M	x	(M,1)	(M,2)	(M,3)	(M,4)	(M,F)	I(M,l)

【図1】

